

日本語文生成における親疎表現の取り扱いについて

3B-4

吉村 雅子 甲斐 郷子 中村 順一 吉田 將

九州工業大学

1 はじめに

より自然な文生成のためには、様々な語用論的な要因について、考慮する必要がある。既に、我々はいくつかの語用論的要因を考慮した文生成システムを生成している[1]。本報告では、親疎表現に着目し、話者、聴者、動作の関係者の間の関係に従って自然な親疎表現を用いた文を生成するシステムについて報告する。親疎表現のうちの親愛表現として助詞を対象とし、発話者の性別や発話意図、発話内容に関する情報のなわ張り関係を与えることによりこれらを選択する。文生成には語彙機能文法(LFG)の考え方を採用し、親疎表現の選択に関する規則性を個々の語彙記述中の制約として記述する。

2 親疎表現

2.1 親愛表現

敬語、卑語、常語の運用による親愛表現として、敬語を使わなくても話しぶりで親しみを表現する方法がある。また、これとは別にいわゆる親愛語と呼ばれる語彙が親愛表現に用いられる[2]。

一般者に対する親愛語としては、人の名の呼び捨てや～ちゃん、～くん、坊ちゃん、お嬢ちゃん、オジイサン等といった呼称があり、もっぱら聞き手に対する親愛語としては、男児への呼びかけであるボクという呼称やイラッシャイ、チョウダイ、ナサイという依頼や命令に関する文末表現、～ネ、～サ、～ヨという文末・句末に付く助詞等がある。

2.2 疎遠表現

疎遠表現には親愛語に対応するような特定の待遇語は存在しない。しかし、敬語が本来心理的な垣根のある間柄や場合で使われることを考えると、疎遠さは、敬語の使用、親密さを表す呼称や助詞の不使用といった方法で表現することが可能である。

話し手と聞き手が疎遠な場合に上下関係に関係なく敬語を用いたり、特に親しい場合に上下関係よりも親しさが優先したりすることから分るように、待遇表現において、上下関係と親疎関係は全く独立に作用するのでなく相関があるといえる。

3 終助詞・間投助詞の用法

3.1 意味および用法上の特徴

話し手の、聞き手を主対象とした同意・応答などの働きかけを表す助詞のうち、文末のみに用いられるものが終助詞であり、句末に用いられるものが間投助詞である。

終助詞は、文表現の成立に関与するものとしなくても大別される。文表現の成立に関与する終助詞には詠嘆の「ナ」、禁止の「ナ」、疑問の「カ」等がある。これらの終助詞が文からなくなると、話し手の意図が正確には表現できない。これに対し、聞き手の注意を促して同調を求めたり、念を押ししたりといった、話し手の態度を表現する終助詞は、ある意味では存在しなくても文として成立する。

以下に、文表現の成立に関与しない終助詞として、押念の終助詞と呼ばれる「ゼ」、「ワ」、「ゾ」、「ヨ」の用いられ方を示す。

「ゼ」・男性に限って用いられ、ぞんざいな感じがある。

「ワ」・主として女性が用い、敬体・敬語とも共存する

- 「ゾ」・男性の仲間うちの会話に限って用いられる。
・敬体とも共存しうるが、年輩の男性に限られる。
- 「ヨ」・男女とも用いるが、用法上相違がある。
・男性の仲間うちで用いられる場合、敬体・敬語とも共存しうるが、押しつけがましい語感が伴う。
・女性は、「ワヨ」、「ノヨ」、「コトヨ」などの複合形で用いられる。敬体・敬語とも共存し、物柔らかな語感を持つ。

一方、「ネ」、「サ」、「ヨ」といった、文中にも文末にも用いられる間投助詞は、今親しく話しかけているという話し手の態度を表す。以下に、文末に現れる「ネ」、「サ」の用いられ方を示す。

- 「ネ」・男女とも用い、敬体・敬語とも共存する。
・相手に返答を促し念を押す意を表す。
- 「サ」・男性語的な性格が強い。
・言い切ったり、言い放つたりする意を表す。

終助詞・間投助詞は、文末に複数個共存することができ、大体、次のような順序で現れる。

1. 文表現の成立に関与する終助詞
2. 押念の終助詞
3. 間投助詞

3.2 「ね」と「よ」の意味

次の二文は、前節での用法に基づいた文である。

- (1)? きみが行くよ
- (2)? 僕が行ったね

しかし、これらの文には不自然さが残る。

日本語では、話し手・聞き手と当該の情報との関係が重要な意味を持つ。「ネ」は、話し手の有する情報や意向と、聞き手の有する情報や意向とが、基本的に一致するという話し手の判断を表す。「ヨ」は、聞き手の有する情報や意向が、話し手の有する情報や意向とずれがあるとの話し手の判断を表す[3]。(1)(2)の文の不自然さはこの点に関する話し手の考慮の欠如による。

話し手と聞き手の有する情報についての理論として、神尾[4]による情報のなわ張り理論がある。話し手または聞き手と文の表す情報との間には、一次元の心理的距離(〈近〉または〈遠〉)が成り立つ。Xに〈近〉とされる情報の集合を〈Xの情報(のなわ張り)〉とする。Xは話し手または聞き手のいずれかであり、なわ張り関係の組み合わせは4通りとなる。表1に示す様に、それぞれの場合に適切な文形が定められている。

表1: なわ張りりと文形との関係

		話し手のなわ張り	
		内	外
聞き手のなわ張り	外	直接形	間接形
	内	直接ね形	間接ね形

直接形 確定的な断言の形をとる文形

主述語の言い切り又はそれに文体的助動詞「です・ます・ございます」が付加された形

間接形 断言を避けた不確定な文形

推測、伝聞、主観的判断等を表す要素を文末に持つ

ね形 文末にネが付く文形

